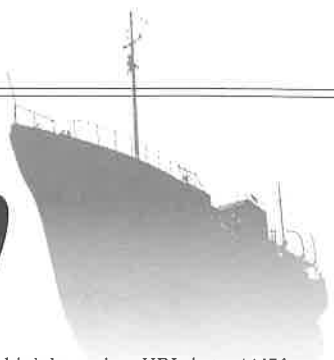


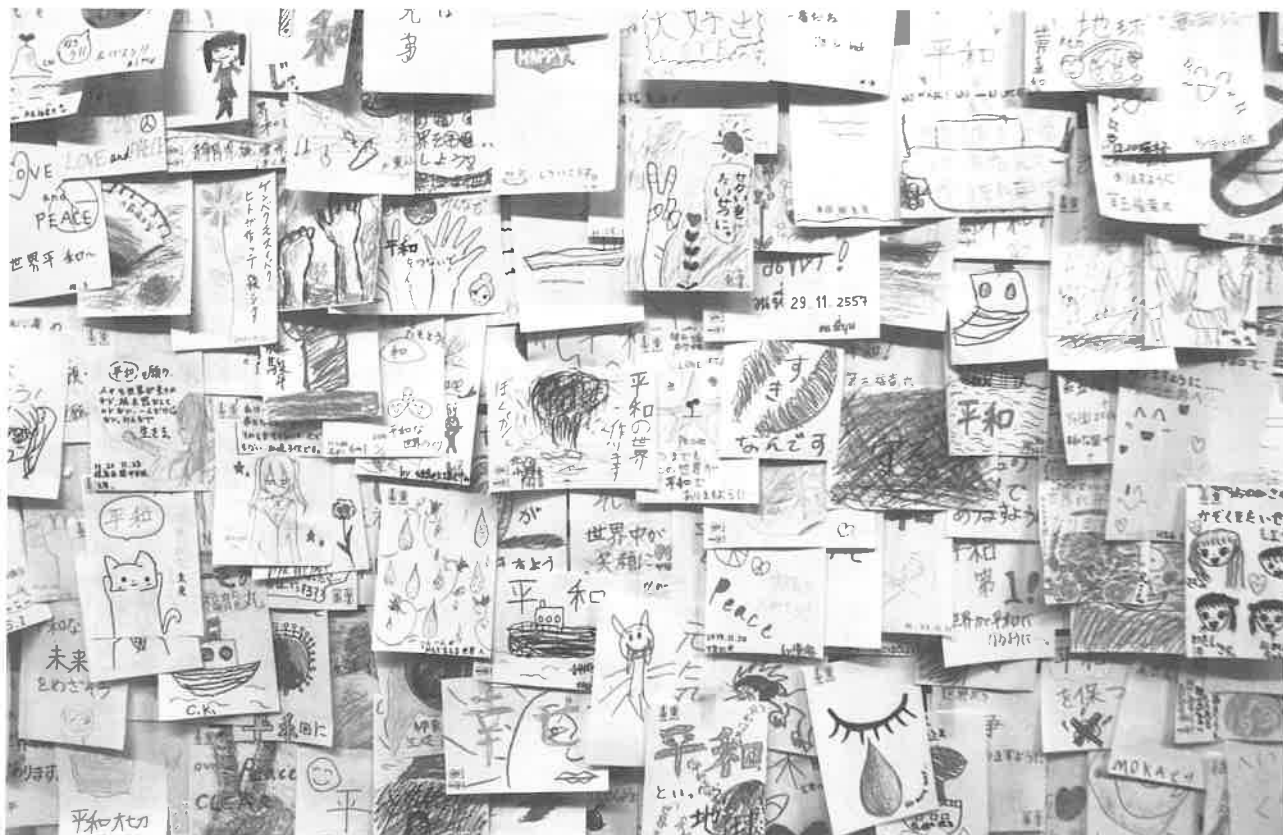
2015.01.01  
No.385  
(1・2月号)

# 福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



たくさんの方の平和願うメッセージ、核兵器も戦争もNOの声びつしり



## ヒロシマ・ナガサキ70年 核の非人道性を世界に伝える

公益財団法人第五福竜丸平和協会代表理事 川崎昭一郎

明けましておめでとうござい  
ます。  
今年には広島・長崎の原爆投下  
から七〇周年に当たります。

また、五年毎の核不拡散条約  
NPT再検討会議が行われる年  
です。

昨年一二月八、九日にはウイ  
ーンで「核兵器の道徳的影響に  
関する国際会議」が非核国のイ  
ンシアティブで開催されまし  
た。一昨年三月のオスロ会議、  
昨年二月のメキシコ・ナヤリッ  
ト会議に続き、ウイーン会議は  
三回目でした。

ウイーン会議には核保有国か  
ら米英両国が初めて参加し、参  
加国は一五八カ国に増えまし  
た。

議長国オーストリアは  
(各国) 代表団の大部分は核  
兵器の最終的な廃絶は、核兵器  
禁止条約も含む法的な枠組みの  
中で追求されるべきだと強調し  
た

とする議長による総括を発表

しました。

核保有国が参加した中で禁止  
条約への討論を進めようとの意  
見が多数を占めた意義は大き  
く、NPT再検討会議にむけて  
進むべき方向を示唆していま  
す。

第五福竜丸平和協会はビキニ  
水爆被災事件の六〇年に当たる  
昨年、3・1記念集会、『第五福  
竜丸は航海中』(ビキニ水爆被  
災事件と被ばく漁船六〇年の記  
録)の刊行、連続市民講座の開  
催などを行ってまいりました。

新年は、企画展の開催、『第  
五福竜丸は航海中』の普及とと  
もに、市民講座の豊富な内容を  
もとにした報告・資料集を作り  
たいと思います。

広島・長崎七〇周年に当たり  
改めて私ども公益財団法人の責  
任を自覚し、第五福竜丸展示館  
に來られる方々に良い内容を提  
供できますよう、役員、ボラ  
ンティア手を携えて努力致した  
いと考えます。

# 新たなる出航の コンサート



崔善愛 (ピアノ) 戸島さや野 (ヴァイオリン)  
竹原奈津 (ヴァイオリン) 三宅進 (チェロ) 大島亮 (ヴィオラ)

一〇月二六日、「ひびきあう第五福竜丸のしらべ」が開催されました。演奏者と船とが向き合ってひびきあう展示館コンサートも五回目。ビキニ水爆実験被災・第五福竜丸被ばく六〇年の節目となる今回は「新たなる出航のコンサート」と題して、ピアノと弦楽四重奏、そして歌役者、アコーディオンによる演奏が、希望を紡ぎ、一二〇人の参加者とひびきあいました。

## 船体に響くベートーヴェン

第一部はベートーヴェンです。弦楽四重奏曲第四番に続き、ピアノ協奏曲第四番ト短調作品58。気迫のこもったヴァイオリンをチェロが力強く支え、崔善愛さんのカデンツァに、胸が締め付けられた方も多かったのではないのでしょうか。ピアノと弦の奏でる繊細な音の粒子が、船体に波のように反射しては、展示館の天井にまで響き、客席にふりそそぎます。

船を取り囲むようにしつらえられた客席では、どこに座っていても音が届くのですが、目に映る風景は、座席位置によってそれぞれ違います。秋の日の夕暮れから始まったコンサートは、刻一刻と暮れてゆく空とともに深まり、演奏者の後背のガラスに船体が映るようになる頃、厳かにベートーヴェンが終わりました。

インターミッションには、ボランティアの会によるドリムクサービスがあり、ホットレモネードでほっと一息。

つづく第二部は、私たちのコンサートには無くてはならない存在の林光さんの作品です。

新藤兼人監督の映画『裸の島』の主題によるチェロのソロ演奏、パブロ・カザルス採譜の「鳥の歌」、そしてピアノ五重奏曲「ラッキードラゴン・クインテット」です。福竜丸の航海に伴走する、気迫のこもる演奏でした。

## 希望をたもち続けるために

演奏に先立ち、崔善愛さんは、新藤監督の言葉を引いて「わたしたちは何もかもわかったかのように一〇歩も二〇歩も先を歩いている気になつてはいるが、人間は一步一步ずつしか歩けない。この時代のありようを愛いて、時に誰かのせいにしたくもなるが、自分自身が責任を負うしかない。」と語り、「絶望のあとには必ず希望がやってくる、

そしてまた絶望するのが人生、だからこそ希望を失つてはいけない。」という林光さんの言葉を紹介しました。

## 最後の武器

今回、多くの人にとつて初めて聴くことになったのが、「最後の武器」です。この作品は、一九五八年の第四回原水爆禁止世界大会の最後に日比谷野外音楽堂で演じられた群集野外劇(シユプレヒコール)です。ヴァイゼンホルン作「世界に警告する(ゲツチンゲンカンタータ)」を安部公房が翻案し脚本、音楽・林光、演出・千田是也、劇団民藝や俳優座などの演劇人・音楽人約二〇〇人によって上演されました。

今回は、オペラシアターこんにやく座の歌役者たちによりコンパクトに再構成したものが上演されました。タイトな旅公演の合間を縫って練習し、衣装や小道具などを駆使し引き締まった演出でした。場面毎の標題はプラカードが掲げられます。文字は展示館ボランティアの松本アイ子さんの筆によるもの。

「原爆こそ平和の守りだ」「原爆のおかげで戦争を終わらせる



(「ラッキードラゴン・クインテット」第3部)

新たなる航海へ！

2009.5.16.

林光



こんにやく座歌役者 岡原真弓 佐藤敏之 佐藤久司  
太田まり 川中裕子 ピアノ 湯田亜希

# ひびきあう 第五福竜丸のしらべ

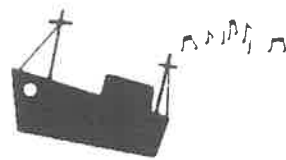
ことができたのだ」という支配者と科学者、「なぜバクダンで平和がくるのか 私たちにはわからない」と歌う人々の応酬、子どもの書いた「原爆詩」、そして第五福竜丸の乗組員たちの受けた苦しみをたどる歌……。言葉をかみしめながら、現在と重ね、最後の「新しい出発のうた」は客席も巻き込んだの全員合唱となりました。

「二〇一一年春、震災後に開催されたアートイベント「EXPOSE死の灰」(KEN主催)です。安田和也事務局長との対談のなかで、林光さんが「楽譜はなくて」と、ほとんど即興で「三人の漁夫たちのバラード」を演奏しました。このたび楽譜を「発見」し提供してくださった林光事務所はじめ、タカギクラヴィア、オペラシアターこんにやく座ほかお世話になった皆様に感謝申し上げます。

(編集部)

## 23人の漁夫たちのバラード

船乗りたちは  
西からのぼる  
太陽をみた  
嘘の太陽は  
赤く海を染め  
やがて  
もえつき もえつき  
間もなく東から  
本物の太陽がのぼると  
白い灰が



降りだした 降りだした  
船乗りたちは食欲を失い  
広島のことを  
思い出す 思い出す  
頭をかくと  
指のあいだに  
髪の毛の束が残った  
久保山愛吉は死んだ  
残り22人も  
二度と船には戻れなかった

## 新しい出発の歌

行こう  
たしかな平和を  
この手につかむまで  
行こう  
ヒロシマの火を  
最後の武器の  
思い出にするため  
行こう  
ふたたびぼくらが  
西からのぼる太陽に  
焼かれることのないために  
行こうよ 行こうよ

## 参加者の感想から

◇中1の息子と来ました。息子と展示を見てからのコンサートを聴く機会をもてたことが嬉しかったし、平和な道を歩

いていきたいと希望をもつことができました。

◇乗組員たちの命を守ろうとする気持ちみたいなものを感じました。第五福竜丸もこの音楽を聴いているかなあと思いました。とてもいい音楽だなと思ったのは「ラッキー・ドラゴン」という曲です。漁師みたいな音楽でした。こんにやく座の人たちは、とても心がこもった歌声でした。「原爆で平和がきた」という人もいたけど「原爆は何もうまない」という人もいて、僕もそう思いました。

◇人類が生き残っていくためには核の廃絶しかないと思います。何度も思い出して、決して忘れてはいけないことを示し続けるために、この展示館は大切な存在です。

◇第五福竜丸の傍らで、こんな素晴らしいプログラム、演奏を聴くことができて、記憶に残る一夜になりました。

◇船体に響く音楽！第五福竜丸の実物を見て、ビキニ核実験被害の痛ましさを悲しさがわかりました。僕も人を大切にしていきたいなあ、そう思いました。

## 福竜丸元乗組員

## 池田正穂さん、

## 見崎進さんに聞く

昨年一月、見崎進さんの営む食堂「百小屋（ひやくしよや）」（静岡県島田市）に池田正穂さんを伴い訪問しました。お二人とお会いできたのは高校生の平和活動をサポートする粕谷たか子さん（元高校教諭）の仲立ちでした。

## 池田正穂さん 「西から太陽が上がった」

池田さんは焼津市に在住、粕谷さんの車に同乗し自宅にうかがうとすでに玄関に出て待っていてくださり、「やあやあ」と大きな声で迎えてくれました。



左・池田さん、右・見崎さん 60年も経って今なら若い人に話してもいいと語るお二人。高山文孝撮影

張りがある。いまも病院には自ら運転して通う。「免許は返上したくない、百歳まで運転するさ」と笑います。

池田さんは機関員。「エンジンの調子をみたり、しよつちゅうアチコチに油を注したりと忙しかった。賄いで使う米炊く燃料の油も機関場の油をまわしてた」。この仕事が好きだったと言います。

「機関場は四時間交代でエンジン面の面倒をみる。機関長も当番をした。みな一緒だ。はえ縄の作業もやった」。いまも漁師らしい頑丈な体つき、精悍な面影が残ります。

池田さんは、入院中に長文の手記を『文芸春秋』誌に寄せました。その冒頭に、「太陽が上がるぞおー」「馬鹿野郎、西から太陽が上がるのかッ!」「突然西の方が一面焼けただれたように真赤になったんだ」と記しています。

「三時間位経つと、空一面に覆いかぶさってきた雨雲のためか、南洋には珍しく雨が降りだしました。しかしそれと同時に問題の『死の灰』が降ってきたのです」。

三月下旬、東京の東大病院

と国立第一病院に分かれて転院。池田さんはこの時の心境を、「慰められたり、捨て鉢になったり、励ましたり、苦悩したり、とにかく希望のない灰色の療養生活が始まりました」と記しています。

翌年五月によくやく退院し実家に戻ったとき、父が営む家業の「あんこ屋」の「あん」をお客さんが近所の川へ捨てているのを目撃します。結局お店をたたむことに：「あのとき福竜の乗組員は見舞金をもらったから、その金が店やめてからの当面の生活費にもなったなあ」。

焼津では福竜の衆のところへは嫁に行かない、という話もささやかれていました。「焼

## 見崎進さん 戦争の時代を生きて

今年八八歳になった見崎進さんも元気な様子です。「漁

労長・見崎吉男さんを「兄さん」と呼んでいたが、本当は叔父だ。誘われて福竜丸に乗った。船の舵とり役、操舵手で二時間交代かなあ。舵輪は一メートル三、四〇センチくらい、回すと鎖が左右についていて、後ろの舵までつなが

津にいては仕事もままならなると京都に行った。久保山志郎さんは岐阜に、大石さんたちは東京に出た。一〇年ほど京都暮らしのあと焼津に戻り、長距離トラックのドライバーとして定年まで働いたのはよかった。車の運転はいまも好きだし：」。

最後に池田さんはこう語りました。「二三歳でカツオ船に乗り、マグロ船に乗りたくて福竜丸に乗った。水爆だ、原爆だとにかく二度と犠牲者が出ないようにしてほしいと願ってきた。いま、福島の事故が起こって、ここは浜岡原発も近いけど、やはりダメだと思ふよね」。

「甲板でのマグロの処理は交代でみんなやったな。カジキがたまにかかるけれど、危ないので二人がかりで角を押さえ、鋸切りで切り離す。サメも危ない。死んでいても歯が鋭いから口の中には絶対

(ちめんにつづく)

## 東大に入院した 患者と交流して

広瀬なかさん語る

東京大学付属病院に入院した福竜丸乗組員七人と、病院からの依頼で交流を重ねた元東大生協職員の広瀬なかさんが静岡県生協連の学習会で当時の様子を報告しました。

### 患者たちを見舞う

六月頃でしょうか、乗組員の病状がそれなりに落ち着いてきて、病院から、患者さんはお見舞いの方ともまだ会えないし家族も遠隔地でなかなか来られないので、なにかできないだろうか、という話がありました。

私は生協の事務をしており、まず見舞ってみよう、というので、軽い気持ちから始めたのですが、一年ちかく続けることになりました。

東大生協の職員は七、八人

いまして、毎日お見舞するのはなかなか大変で、昼休みに食事後、病室にうかがうのですが、仕事が忙しくて行けないこともありました。原水爆のことはなにも知らないまま、とにかく気の毒だという気持ちでお手伝いしました。

### 秋には遠足に

秋になると健康も回復し、病院側から外の空気を吸わせたい、連れ出してほしいとの要望もだされました。そこで主治医の三好和夫先生と相談のうえ日帰りのバスハイクを計画しました。行き先は浜離宮でした。

乗組員のみなさん、久々の外出でおしゃれして出かけました。入院から半年余り、気詰まりな生活から一時解放さ

「二事件60年  
学習講演会」



船は協同丸と命名されている。左から二人目広瀬さん

れてか、とても喜んでくださいました。

バス旅行は、主治医、看護婦、東大職員など五〇名ほどでした。この頃もマスコミの取材は大変で、東大からバスで逃げるように出かけましたね。昼食のお弁当は、大学生協の食堂で仕立てたのですけれど、若い学生向きのもので、若く作ったことがないので、とにかく丁寧な、などと頼んだことを覚えています。

このとき、当時流行っていたスクエアダンスをみんなで踊りました。輪になって手をつないで、音楽に合わせて簡単なステップを踏む集団ダンスですが、何となく照れくさそう。帰りには皇居前広場に寄って二重橋を背景に記念写真を撮りましたね。

### お礼の模型船

退院の記念に生協の喫茶店「メトロ」でお別れ会を催しましたね。このとき模型船をいただきました。私が代表して見崎漁労長から受け取りました。患者の皆さんとの交流は私の生き方を大きく変えた一コマだと思っています。

(4めんつづき)

手を入れない。

マグロを揚げてると縄が絡むことも一回や二回はおこる。モーターでどんどん巻き上げるので処理は大変だ。マグロを入れる漁倉は当時は水だった。水は溶けるので、その水を掻い出しました。

あの頃は、遭難する船が多かったから、おんなじ船に家族で乗らないんです。沈んじやえば働き手がなくなっちゃうから分かれて乗った」。

当時の漁師の多くは、戦争中に徴用漁船に動員されています。見崎さんは「三度死に損なった」といいます。

「一七歳のとき神戸の日産丸に乗ったが、運よく撃沈された時には船を下りてた。その後も二年駆り出された。『監視船』といい小さな大砲と機関銃を付けただけの船で硫黄島まで行きました。監視のためにマストに昇っていたら敵機が来襲、機銃掃射で甲板にいた四人亡くなった。死体を甲板に並べて釜石まで帰りました。終戦は函館だった」。

見崎さんは一昨年の秋、平和活動をする高校生グループ

に請われて話しました。そこで死の灰をあびた後の異変について述べています。

「皮膚がひどい日焼けのようになり火傷のように火ぶくれができ、皮がむけてきた。下痢が三日ほど続いた。人によって症状は違ったが、ひどいものでした。放射能のことは知りませんでした」。

最後に今の心境について、「六〇年経つたいま、やはり戦争は怖いなあ、というのが一番の思いだな。若いころに戦争があり、やっと終わり、必死で食うために福竜丸に乗って水爆にあつた。漁師をやめなければならなかつたことがつらかつたな。

病院を出て、定まらなくてぶらぶらしていました。そんなとき新聞に、見崎氏、豆腐屋を始める」と、言つてもいいのに書かれたんです。それで商売するかと豆腐屋から始めてホテルやらこの食堂をやり、うまくいったからよかつた。ここまで生きてきて、とにかく戦争はいかん。わたしは悪運が強いかもしれないなあ」と豪快に笑いました。

(安田和也)

連載②

晴れた日に  
雨の日に

山村茂雄

「戦後私は平和を求めてな  
にをしてきたか。一九五四年  
に「杉の子会」に入り、翌年

朝日新聞の「ひととき」欄の  
投稿者を母胎にして生まれた  
「草の実会」の会員となった。  
振り返ってみれば、私の行動  
の原点はビキニ被災である」  
——一九九一年七月一日発行  
の「福竜丸だより」に載る  
斉藤鶴子さんの文章の一節で  
す。以下ここで述べられてい  
る二つの会の活動に触れなが  
ら斉藤さんの「原点」をたど  
ってみたいと思います。

「杉の子会」は東京杉並に  
おける原水爆禁止署名運動を  
担った主婦グループとして知  
られています。一九五三年  
十一月、杉並公民館長の安井  
郁氏を囲んで四〇代の主婦を  
中心に社会科学を学ぶグルー

プとして発足。会の名称は童  
謡「お山の杉の子」からとら  
れたといえます。

斉藤さんが入会した五四年  
八月の学習会の日は「水爆禁  
止署名運動がはじまって間も  
ないときで公民館の学習室は  
参加者であふれ、立つ人もい  
たほど」でした。杉並区の水  
爆禁止署名運動は五月から取  
り組まれ、すでに六月末には  
二六万に達していました（当  
時の人口約二九万）。

八月六日、署名集約センタ  
ーとして原水爆禁止署名運動  
全国協議会が結成され事務局  
長に安井郁氏を選任、杉並公  
民館館長室に事務局が置かれ  
ます。翌一九五五年広島で世  
界大会が開かれるに至ること  
はご承知のとおりです。

\*  
斉藤さんが原水爆禁止世界  
大会に参加するのは第六回世  
界大会が最初だといえます。

日本原水協は前年の第五回  
世界大会前の三月に結成され  
た安保改定阻止国民会議に幹  
事団体として参加、日本の核  
武装と自衛隊海外派兵をもた  
らす安保条約改定に反対を明  
らかにしていました。広島県

議会が第五回世界大会への補  
助金支出を削除、自民党が原  
水協への自治体助成金の支出  
中止を各県連に指示したのも  
この年でした。

安保の問題は杉の子会にも  
動揺が及び会を去る人も出ま  
した。「私はとどまるほうを  
選んだが、大会が大成功と語  
られる中で、私は孤独であつ  
た」「第七回世界大会、第八  
回世界大会はソ連の核実験評  
価をめぐって混乱し、杉の子  
会の中でも意見はまちまちで  
あつた」。「納得がゆかない」  
状況の中で、斉藤さんは、か  
ねて共感を寄せていたイギリ  
スの哲学者バートランド・ラ  
ッセル卿に六二年一〇月三〇  
日付で手紙を送ります。

\*  
斉藤さんの手紙には二つの  
質問が含まれていました。一  
つは「日本人のある人々はア  
メリカの核実験とソ連の核実  
験を区別すべきだといってい  
ます。—私はやはり区別すべ  
きでないと思います」。もう  
一つは「ある人びとは基地反  
対運動は平和運動の立場から  
正しくないと言っています。  
どのような行動をとるべきで

しょうか」というものでした。  
一二月七日付のラッセル卿  
の返書は「すべての核実験は  
即時やめるべきこと。ソ連と  
アメリカの死の灰を区別する  
ことは間違いであること、核  
基地に反対することは第三次  
世界大戦を避ける運動として  
欠くべからずこと」という明  
快なものでした。斉藤さんの  
ラッセル平和財団への協力は  
生涯を通じてつづきました。

\*  
一九六三年、第九回世界大  
会は分裂。「運動は当初のヒ  
ューマニズムの精神から離  
れたものになったしまった」  
と斉藤さんは書いています。  
一九六四年、杉の子会は原水  
協加盟を中止、一〇年余続い  
た読書会も開かれなくなり、  
安井郁氏も日本原水協理事長  
を退きます。安井さんから「斉  
藤さんは草の実会で原水禁運  
動を続けるように」と言われ  
たことも記しています。

「草の実会」は朝日新聞家  
庭欄「ひととき」への投稿者  
から生まれた女性グループ。  
ビキニ事件後の五五年に結成  
されました。「杉の子会」を  
引き継ぐように草の実会に平

和研究グループも生まれま  
す。七〇年二月、八月一日五  
日を記憶する反戦・平和の「一五  
日デモ」がはじまります。デ  
モは毎月が年二回（五月八月）  
となりますが、斉藤さんは休  
みなく参加、二〇〇〇年八月  
の一〇〇回目には入院先から  
メッセージを託しました。

\*  
斉藤鶴子さんはこの年の九  
月三〇日九二歳で亡くなりま  
す。「一五日デモ」は一〇四  
回で終了。草の実会が会を開  
じたのは二〇〇四年でした。

\*  
斉藤さんは、第五福竜丸保  
存運動当初の一九六八年から  
参加され、平和協会設立以後  
は評議員、理事を長く務めら  
れました。またチェルノブイ  
リ原発事故以後は反原発の立  
場を明確にされ、放射能被害  
を伝える第五福竜丸展示館の  
役割を強調されてきました。  
振り返れば、斉藤さんの行  
動の原点ビキニ被災から第五  
福竜丸保存運動へとつながる  
行動の軌跡は、いくつもの航  
跡を引いて人びとの記憶に生  
きつづけるでしょう。（やま  
むらしげお／第五福竜丸平  
和協会顧問）

被爆70年に思うこと

## 日本被団協事務局長 田中熙巳さんに聞く

昨年一二月にウィーンで「核兵器の人道上の影響に関する国際会議が開催されました。ノルウェー、メキシコに続き三度目。会議では、核爆発が起きた際の対応能力に関する議論について、日本の軍縮大使が「悲観的すぎる」と述べたことなどが問題となりました。会議の模様を日本被団協事務局長の田中熙巳さんに聞きました。

**会議が示した方向**  
核兵器使用の人道上の影響について合意した二〇一〇年のNPT再検討会議以降、核兵器の非人道性に関する議論が活発に行われてきました。核兵器をこのまま放っておく訳にはいけないという空気が生まれ、被爆者が長年積み重ねてきた主張が国際社会でようやく形になってきたという手応えを感じています。

特にマーシャル諸島やオーストラリアなどの核実験被害をはじめとした包括的な核被害の報告など、大きな進展がありました。昨年四月、マーシャル諸島共和国が九核保有国を相手に国際司法裁判所に提訴したことも注目されています。

今回の会議には核保有国である米・英が参加しましたが、非核国のイニシアチブによる国際的な流れづくりに否定的な意見を表明しました。しかし、いま大切なことは、これまでの国家間の安全保障という視点から抜け出し、人間にとって核兵器とは何かという視点に議論を転換していくことなのです。一方、日本国内では核兵器の非人道性が市民レベルで議論されているとは言えません。新しい世代を取り込んで被爆七〇年に向けた取り組みを進めていきたいと



思います。

### NPT再検討会議への期待

被団協から四〇名ほどの被爆者が、ニューヨークへ行く見込みです。若い層が多く今までとひと味違う代表团となります。前回同様、国連で原爆展を開催します。

非人道性を訴える声が高まるなか、核保有国は依然として核軍縮の努力をしていると主張しますが、実態は伴っていません。NGOの間では、対人地雷を禁止したオタワプロセスのように核保有国が動かずともNPTの枠内でNGOや有志国が中心となり核兵器禁止条約に向けた議論を始めようという動きも活発化しています。

いずれにしても核兵器は使わせないこと、なくすことが先決です。NPTの枠内でも核兵器禁止条約に向けた交渉をすぐに始める必要があると思います。

### 被爆七〇年に思うこと

被爆七〇年も、今までやってきたことを一歩一歩進めていきます。核兵器の廃絶は今すぐには叶いませんが、少しでも前へ進めるようにと努力してきました。しかしこれまでの運動を知らない世代が増え、被爆者がやってきたことをどう受け継いでいくかが問

題です。その下地作りをやっていきたく思います。

戦争を知らない人たちが被爆者の声を直接聞き、映像や本で体験に触れる機会をもつと作らなくてはなりません。押しつけではなく、若い世代から被爆者の話を聞かせてほしいという声が出てくる事が大切です。そのために、もう一度原点にもどり、被爆体験だけでなく七〇年前の戦争そのものについて市民レベルの戦争被害を結集する総合的な取り組みをしていきたいと考えています。

(たなかてるみ談・文責編集部)

## 映画『放射線を浴びたX年後』の 監督と展示館学芸員

### トークセッション

2月7日(土)14:00~  
第五福電丸展示館

参加  
無料

「ブラボー実験だけがフォールアウトを発生させたのではない」「第五福電丸以外にも、こんなにたくさんの被災船が！」10年にわたり独自の調査報道を重ねてきた南海放送の伊東英朗ディレクターと展示館学芸員が、最新資料・映像を紹介しながら、ビキニ事件の深部に迫ります。

## 大石さん、核廃絶を訴え続け 下町人間文化賞受賞



第五福竜丸元乗組員の大石又七さんが、「下町人間庶民文化賞」（下町人間の会主催）を授与されることになり、12月7日に授賞式に臨みました。同賞は、「一隅を照らして庶民の暮らしと文化、民主主義と平和を守るために献身」されてきた個人に贈られるもので、今回で29回目。大石さんが長年にわたり核実験被ばくの体験を語り核なき世界実現への活動を続けてきたことへの受賞です。

授賞式は浅草・伝法院の大広間を会場に、これまでの受賞者、地元の関係者など80人余が参加し、賞状と記念品が贈られました。午後からは浅草公会堂に会場を移して祝賀会が行われ、大石さんは、感謝を述べるとともに、核の惨禍をくりかえさせてはいけなとの思いを語りました。第五福竜丸平和協会から安田和也事務局長が祝辞を述べました。この日受賞されたのは、田中正造研究者の梅田欽治さん（宇都宮大学名誉教授）、日本・アジア近代史研究者の中塚明さん（奈良女子大学名誉教授）など5名と故人3名に特別功労賞が贈られました。【写真は新井卓さん】

## 三宅賞に青山道夫氏

12月6日、霞が関ビル東海大学校友会館で地球化学研究協会学術賞（三宅賞）の受賞式がもたれました。今年の受賞者、福島大学環境放射能研究室の青山道夫教授に賞状が授与され、同氏による記念講演がおこなわれまし

た。

青山氏は、気象研究所地球化学部で人工放射性降下物の地球規模の研究を長年続けてきました。今回受賞の研究題目は「セシウム137の高精度分析とデータベース化に基づいた海洋循環の研究」で、三宅泰雄氏の先駆的研究を引き継ぎ、核実験等に由来するセシウム137が海水の循環の指標となることに着目し、海洋のセシウム137

濃度のグローバルな分布と時間変動から、海洋の数十年スケールの循環像を明らかにしました。また、福島原発事故に関連し、日本の海洋放射能汚染研究を先導し情報を世界に発信しました。青山氏は、被ばく60年記念の市民講座の第一回にて報告するなど種々の機会に、専門家として当協会の事業に協力されています。

## 3・1ビキニ記念のつどい

### 最新ドキュメンタリー特別上映

## わたしの、終わらない旅

核・放射能を追う坂田雅子監督の終わらない旅、ラ・アーグ、ガーデンズ島、セミバラチンスク、マーシャル、福竜丸、フクシマ

\* 2015年2月28日（土）午後2時より4時30分

\* 会場 東京スポーツ文化館研修室

（江東区夢の島公園内、第五福竜丸展示館から徒歩5分）

\* 坂田監督とフォト・ジャーナリスト豊崎博光さんの対談

\* 資料代 500円

## ビキニ水爆実験被ばく60周年アート企画

## ゴジラと福竜丸～想像力と現実

会期 2015年1月24日～3月22日

国民的人気怪獣、ゴジラが誕生したのは1954年。この年の3月1日のビキニ水爆被災事件に着想を得て制作された。

核実験により呼び覚まされた太古の怪獣ゴジラ。人間に襲いかかり破壊の限りをつくす。吐き出す霧は放射能…ゴジラは水爆の化身、ヒトは自ら作り出した破壊の極致ともいべき核爆弾で滅びるのであるか…。しかし人びとは声をあげ、水爆実験中止、原水爆反対は世界にひろがり第五福竜丸も遭された。

1954年そして2011年が私たちに問いかけるものは…画家、武蔵野美術大学の長沢秀之教授が学生たちと取り組んだ「大きいゴジラ 小さいゴジラ」作品を第五福竜丸のもとに展示。ゴジラ作品をとおして、今

に生きる私たちの「現実と想像力」はどのようにひろげられていくのか。第五福竜丸の被ばく60周年の最後の、そしてヒロシマ・ナガサキから70年の最初の企画展です。

### 〈おもな展示〉

大きいゴジラ小さいゴジラ、レインボーゴジラ、ゴジラの日、尻尾、腕、着ぐるみ、ぶらりんゴジラ、フィルムとしてのゴジラ、小さいゴジラとRマーク、日常のゴジラ、ビデオインスタレーション・ゴジラなど

### \* オープニング・トーク

長沢秀之さんとムサビの学生たち「ゴジラの想像力、福竜丸の現実」  
2015年1月25日（日）午後2時  
参加無料